ホグワーツと天才美少女錬金術師☆

上帝

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カリおっさんがホグワーツに来たようです。

１６／１１／１６）独自設定タグを追加しました

目次

ある魔法薬学教授は ―― 1
ある闇の帝王は ―― 8
ある魔法魔術学校校長は ―― 16
ある純血の一族は ―― 24
ある純血の少年は ―― 32

ある魔法薬学教授は

ホグワーツ魔法学校に入学して、もう6年になる。

5年次の学期末に行われたO．W．L試験も終わり、生徒たちはN．E．W．T試験に向けて新しく選択科目を選ばなくてはならない。

当然、ここで選ぶのは将来の職業を見越して選択しなければならない。だが、生徒全員が選んだ科目全てにまじめに取り組むかというとそれも違った。

僕にとって重要なのは、魔法薬学と闇の魔法に対する防衛術。この二つは必修であるし、年々難しくなっていく。僕は最低限選ばなくてはいけない選択科目で楽なものを選び、この二つをその科目の時間で自習しようと考えていた。

とは言っても、新たに開講される科目がどんなものか分からない僕は、ルシウス先輩に相談した。ルシウス先輩はその相談を受け、即決で一つの科目を勧めてきた。

錬金術学。

O．W．L試験を終えた6年生以降に開講される科目で、なんと驚くことに最初の授業に出席するだけで合格が決定するらしい。

錬金術と言えば、歴史上の人物であるニコラス・フラメルが有名だ。だが学生の学べる範囲で錬金術に近いものは魔法薬学くらいであり、錬金術を学ぶ科目は今まで聞いたことも無かった。

魔法薬学の難しさを知る僕としては、そんな科目がただの1度の出席で合格と言われて眉唾だったが、ルシウス先輩が嘘をつくとも思えない。

とりあえず今年度の開講科目であるかどうかを調べてみた。そしてその科目、錬金術学があった。

けど……。

《錬金術学　担当教授：天才美少女錬金術師カリオストロ様》

今年度の開講科目一覧の中で、既定の枠からはみ出ようと知ったことかと言わんばかりに書かれた担当教授の名前があった。というか、装飾過多すぎてはみ出してしまい不格好でもある。

そして、書かれていた名前もまた独特だった。

錬金術師カリオストロ。錬金術の開祖としてホグワーツ創成期から今も生き続けていると学んだ歴史上の人物。

これは、魔法史で学んだことである。偉大な錬金術師であるニコラス・フラメルが６００歳近いことを考えれば、その開祖となれば１００年前のホグワーツ創成からずっと生き続けている……と考えたけど。

流石に、そんな人がこんな科目案内を出すとも思えない。そもそもホグワーツ内の教授にカリオストロなんて名前の人物は一度も見たことが無い。

しかし、ルシウス先輩曰く。

この錬金術学は毎年開講しており、実際に合格を貰ったスリザリン生も何人もいるらしい。ルシウス先輩自身もその一人だとか。

調べるほどに胡散臭さが増したけど、当初の目的は楽な授業で時間を増やしたいというだけだ。僕は先輩にお礼を言い、錬金術学を選択することにした。

最初の受講日。錬金術学の教室に僕は来ていた。

なお、この教室だが。案内には乗っておらずルシウス先輩に助言されてようやく見つけたという経緯がある。装飾過多の名前だけ載せておいて、重要なことを載せないあたり適当な科目だという認識がさらに強まった。

教室内には４寮の生徒が平均的にいる。おそらくは僕と同じように、先輩に聞いて楽だからと来たんだろう。

ふと、その中のグリフィンドール生の集まりに目が行った。その瞬

間に、僕の不快指数が一気に上昇した。

忌まわしき男、ジェームズ・ポッターとその取り巻き。

奴らもどうやらこの授業を嗅ぎ付けてきたらしい。まったく、どこで知ったのやら。

しかし勤勉さのかけらもない奴らしいともいえる。大方、簡単に合格できるということを聞いて飛び付いてきたのだろう。

そしてここで一つ、他者から見ればくだらないだろうが、僕にとっては意地ともいえる考えが浮かんだ。

奴らはこの錬金術学、最初の授業だけ受けて後はいなくなるだろう。だったら、僕だけでもこの授業を真面目に受けるべき、いやそうでなくてはならない。何気なく浮かんだ対抗心が、僕の心を決めた。それに錬金術学というからには、その知識は魔法薬学にも通じる可能性もある。

授業開始の時間となった時、教室に教授は来なかった。

その代わりに、時間になったと同時に黒板が回転した。黒板には大きな文字で、こう掛かれていた。

『名前を書いて提出すること、以上☆』

黒板一つを使って大きく書かれたそれの下には、矢印が書かれていた。矢印の先は教卓を示している。

最初に動いた生徒は、忌々しきジェームズ・ポッターだった。ノートの切れ端に名を書いて、教卓の上に置く。それに続いたのはいつもの取り巻き3人。

後は、それに追従する連中だ。我先にと行くか、列を作るか、それとも待って人ごみを消えるのを待つか。

僕としては最後を選択することだろう。列に入るも、列を乱すもどちらも甚だしい。こういう時のために、時間を潰せる魔法薬学の教科書を持ってきて正解だった。

指定されている魔法薬学の教科書も、時代の移りと共に間違いである部分が浮き彫りとなってきている。確かに、教科書とは先人の知恵の結晶でもある。がそれは時として凝り固まった思考の羅列に過ぎないこともある。古きを知り、新しきを作り上げる。先人の雁字搦めな思考を紐解き、更なる魔法薬学の深淵へ。

この教科書と相対しているその時、僕は半純血のプリンスとなっている。至高の一時と言っていいだろう。

そんな時間を過ごしながら、僕は待った。

教授がいるならば、この表記名を回収しに来るはずだ。その時に真摯に授業を受けたいと願い出れば、僕だけ特別に授業を受けられるかもしれない。

教科書の粗探しをしつつ、メモを残し、その最後に自身の仮初の名を書き記す。そんなことをしていてふと気が付いた。人の喧騒が消えている。教室にはもう、僕一人だけしかいなかった。

慌てて時間を見ると、授業の時間は残り１０分に差し掛かっていた。つまり、残り１０分となってもこの教室には教授は来なかったということになる。

……少し考えれば、授業時間内に表記名を取りに来るとも限らなかった。無駄な時間を過ごしたとは言わないが、若干落胆をしつつ僕は教科書とノートを仕舞い込んで行く。

片付け終えて、いざ教室を出ようと席を立った。その時だった。

教室の扉が開き、一人の少女が早歩きで入ってくる。杖を振ると同時にカーテンは閉まり、燭台へと火が灯る。

「今年は一人か。まあ、毎年何人も残られちゃあ面倒だ。ちょうどいいか」

そう言って少女は教壇へ立つ。教卓の上に提出された紙を一瞥し、杖を一振りした。

瞬間、紙は形状を変えて薄い木彫りの表札に変わっていった。表札

には1つ1つに名が刻まれている。あれは、提出した生徒の名前か。
「オレ様が直々に授業をするのは、才能と根気のある奴だけだ。ここまで残ってオレ様を待ったお前は、錬金術の真理へ踏み出す権利を得た」
麗しい少女の見た目から発せられる、男勝りな口調のアンバランスさ。
違和感の塊とも言える少女であったが、それよりも僕に響いたのは彼女の言う、錬金術の真理という言葉だった。
「今見せた通り、錬金術の原則は分解と再構築だ。これを生徒としてホグワーツにいる間に体得できるとは言わんし、言わせん。故に第一歩、お前が掴むのは錬金術のとっかかりだけだと思え」
「せ、先生！」
「ん？質問か、勤勉なのは良いことだ。なんだ？」
「先生の名前が……カリオストロというのは、事実なのでしょうか？」
錬金術を学問として、真理を追究するこの少女。
近代魔法史はそこまで得意というわけではないけれど、こんな少女がホグワーツで教職についているとなれば、話題にならないはずがない。
「お前、魔法史で習わなかったのか？この完璧な美少女ボディと、錬金術の真理を知る知識。錬金術師カリオストロ様を置いて、他に存在しえないだろうが」
その言葉に、僕は絶句した。
１０００年の時を生きる錬金術師の開祖。後に、魔法史の教科書を改めて見返すと確かに外見的特徴として美少女である。と書かれていた。
「し、しかし。錬金術師カリオストロは１０００年前の人物。今も生きているとは書かれてましたけど……」
「はっ、自分の常識で捉えてるうちはまだまだだな。いいか、お前……あー、名前は？」
「セブルス。セブルス・スネイプと言います」
「そうか、セブルス。お前は自身の常識をこれから全部覆される。錬

金術を学ぶということはそういうことだ。真理に迫れば迫るほど、お前は人としての常識がどれだけ狭いモノなのかを知るだろう」
そう言った後、少女……カリオストロ教授は、僕をじっとりと見回した。
「まあ、もっともこの場にたまたま残ってただけって話もある。錬金術を学ぶかどうかはお前次第だ。オレ様も忙しいからな、次の授業でまたこの教室に来たのなら……学ばせてやるよ」
「……よろしくお願いします！」

錬金術学は、僕にとっての人生の転機となった。
カリオストロ教授はまさしく天才だった。学べば学ぶほど底が知れぬ錬金術に、僕は魔法薬学と同等かそれ以上に嵌っていた。
それは同時に、僕の魔法薬学への探究心も深めた。ジェームズ・ポッターらがいるホグワーツでは、流れる時間が長く感じたものだが……6年生となってからは、あっという間に時は過ぎ去っていった。
後に聞くと、カリオストロ教授はあのダンブルドア、さらには闇の帝王すらも教え子としていたらしい。
実際にそのことが本当かどうかをダンブルドア校長に聞いたこともあり、事実と判明した時は心底驚き、同時に誇らしく思った。彼女が偉大なる錬金術師であることは、すでに歴史が証明していたのだ。

闇の帝王と死喰い人による事件の後、吾輩はホグワーツの教師となった。
悲しきこともあったが、ダンブルドア校長に願い出て吾輩は魔法薬学を教えることとなった。いずれ現れるだろう、リリーの子を守るため。それもあったが、魔法薬学を教えることは吾輩の希望あってのことでもある。
「魔法薬学をこれから学ぶ諸君らに、まず言っておくことがある。吾輩は無能と怠慢が特に嫌いだ。たとえ、それが我が寮の生徒であった

としてもだ。
諸君らがこのホグワーツに在学している間に、魔法を、学問を究められると思ったら大間違いである。人としての一生を終えても、なおたどり着けぬ真理、深淵がこの世界にはある。それを知る第一歩が、この魔法薬学だと思いたまえ。では授業を始める」

吾輩は今、尊敬する彼女と同じ教壇へ立っている。
彼女とは違い、有無無像を相手取ることにはなれど、それでもその中に光る才を見抜ける程度には、目が見えているつもりだ。この中の一人でも、学問の輩として巣立てるように、吾輩は尽力すべきであろう。
吾輩は、僕を、誇りに思っている。

ある闇の帝王は

ホグワーツ6年生の頃の僕は、とにかく時間が足りなかった。
秘密の部屋を開き、愚かなマグルの父を殺し、その頃から僕はヴォルデモート卿として行動していた。
だが、学生としてのカリスマである僕を捨てることもしない。ヴォルデモート卿としての活動も、始めたばかりで力を入れたい。
何事も新しいことをやろうとすると、どうしても時間が足りなくなる。それは人のサガともいえるだろう。ダンブルドアが持つ逆転時計でも借りることが出来たらと思ったが、奴の輝いた目は僕のことを間違いなく見抜いている。
よって、時間が足りないならば作るしかないと僕は判断した。そこで白羽の矢が立った科目があった。錬金術学だ。
この科目は受けるだけで合格がもらえる科目。自然と時間も確保できる。そう考えて受けたこの科目、僕が参加するということもあり、取り巻きも何人か付いてきた。
当時の僕のカリスマ性は、コミュニケーション……話術におけるものが大きかった。だからこそか、取り巻きの一人が言い出したことに耳を傾けたのは。
錬金術学の教師が、いったいどんな人なのか……見てみないか、と。
後にスネイプから聞いた話によると、当時から今に掛けて錬金術学の生徒の集め方は変わっていなかったことが分かった。
才能と根気。そのどちらも兼ね備えている者しか教えない選民思想。
取り巻きの気まぐれで知ることになった、錬金術師カリオストロの授業に、僕は空き時間を作る計画を崩す程度に興味を引かれていった。
「ちっ、忍耐のない奴らばかりだ。結局、最後まで残ったのはお前だけか。トム」
「まあ仕方ありませんよ。カリオストロ先生の授業はその……苛烈ですので」

彼女の授業は中々にスリリングだった。というのも、そもそも彼女は闇の魔法はおろか、生命の禁忌すら忌諱していなかったのだ。
僕の要領が良かったのもあって、授業はするすると進んだ。結果、錬金術学の時間をヴォルデモート卿としての時間に当てることもなく、僕は最後まで錬金術学を受けてしまった。

「死からは逃れられない。『許されざる呪文』における死の呪い、アバダ・ケダブラに反対呪文がないように、人間には必ず死が訪れる。だが、一度受け入れてしまえばどうってことはない。ただ死ぬってだけだ」
7年生の最初の錬金術学。内容は生と死について、だった。
「……その、仰る意味が良く分からないんですが」
「つまりだ。死は必ず訪れるんだから、その訪れた後をあらかじめ作っておけばいいんだよ。そうすれば死んだのは前の自分で、次の自分は生きていることになる。人の営みを考えればすぐわかるだろ、子孫なんてのはまさにそれだ」
もっとも、自身が生き続ける点で言うなら落第ものだがな。と彼女は続けた。
だが、ここまで言われて察することが出来ない僕でもない。
「つまり。予備の肉体を作り、死を起点に自身をそちらに移す」
「正解だ。スリザリンに10点……ってのもおかしいか、トム自身に10点としておく。7年の最終課題はこれだ。オレ様のように美少女ボディを目指すもよし、理想の肉体を作って死を越えろ」
彼女の授業は、自身の経験則に基づくものが多い。つまり、彼女自身はもうすでに死の超越を体現している。
彼女の教えに従い、僕は魂と肉体に付いて1年間学んだ。それは僕自身も望むところだったからだ。
死が絶対である。だからこそ死を越える。彼女の言葉に、すっかり僕は魅入られていた。これこそ僕が想像に描いていた、魔法使いそのものじゃないか。

「最後の授業だ」
そう彼女が切り出した。
「とは言っても、まあお前なら大丈夫だろ」
「ええ、この日のためにずっと準備してきましたから」
彼女の補助を受けながらではあったが、僕はついに理想の肉体を作り上げた。
彼女の言葉で言うなら、美少女ボディ。好きな肉体でいいとは言ったものの、当時のトム・リドルの外見は、自分で判断しても端正な顔つきと言っていいと思うし、いきなり外見が変わってしまったらそもそもホグワーツにすらいられなくなってしまう。
現状のままでも十分と判断して、僕の新しい肉体は外見はそのままに、健康そうな肌色と、ほんの少し人間よりも強い肉体にした。
そして何よりも……この新しい肉体には、純血の血が流れている。詳細な材料としては、ちょっとばかし協力してもらった僕の友達がいた。それだけだ。
魂の移り先として、作った肉体に魂が宿るように呪文を刻み込み、最後の工程へと移る。
魂を移し替えるということは、元の肉体から魂を引きはがすことと同義。これを無理やり行うことは魔法使いですら困難だ。
一つ。魂を移す方法として、分霊箱という魔法がある。これは人を殺すことで魂を裂き、物体へ魂を宿す不死の術だ。だが、今回はそれの比ではない。魂を裂くどころか、魂そのものをそのまま移し替えるからだ。
リスクはある。けれど、失敗する気は毛頭なかった。当時の自分には失敗なんてものはないと思っていたし、何より彼女が魂を移す作業をしてくれるからだ。彼女に限って失敗などありえない。
「問題はお前自身だ、トム」
「僕自身……と、言いますと？」

「いいか、お前は今からアレに入る。アレはお前にとって完璧な肉体で、拒む理由はどこにもない」
「もちろんです。そうなるように作りました。魂を移し替えるとき、肉体を拒んでしまったら……魂は入る器が無く、消滅してしまう」
「そうだ。絶対に受け入れろ。そうすればこのテーマは合格だ」

魔法陣の上に、僕と移し替えの肉体が並んだ。
彼女の静かで、美しい声と共に儀式が始まる。僕は彼女の振るう杖へ身を任せた。
杖の先を見ていたと思ったら、不意に視点が上にずれた。浮遊感を感じて下を見ると、自分の顔が二つ並んでいて、少々滑稽に思えた。
彼女の杖が指揮棒のように動き、僕に指示を与えた。なすがままに、僕は新しい肉体へと入り込んだ。
新たな肉体に入ったその瞬間に、違和感を感じた。
気持ち悪い。体温を感じない。自分の思っているように、身体が機能していない。
「――い、トム！それはお前の――！――自身だ！」
彼女が叫んでいる。ところどころ、耳が機能しなくて聞こえなかった。
寒い。体の中心から末端にかけて、どこにも熱を感じない。寝転んで触れている床の方が、まだ温かかいかもしれない。
これは僕自身。僕が望んでいた、純血の体。
――僕が純血？
そうだ、僕は純血になった。忌々しいあの父とは違う、新たな肉体で、新たな名前で、新たな自分になった！
――違うだろう。トム・リドル。お前は純血じゃない。穢れたマグルの父に捨てられた、トム・リドル。お前がどれだけ純血に焦がれようと、お前の体に流れているのは――――。

「――げほっ！げほっ！」
むせ返る気持ち悪さで、目が覚めた。
今まで止まっていたものが動く感覚だった。いや、事実止まっていたんだろう。
横眼をやると、そこにあったのは白い肌をした作った肉体。健康的だった肌色とは面影もない。
「ゆっくり深呼吸をしろ。大丈夫だ、お前は生きている」
彼女がいつになく、優しい声でそう言ってきた。
すーはーと深呼吸をするたびに、体全体の熱を感じた。ただ、それだけで涙が出てきた。
「臨死体験。いや、実際にはほぼ死んでるような状態か。得難い経験だったろうが……あれは経験しなくていいものだ。よく戻ってこれたな、トム」
「あ……」
頭にようやく血が巡り始めた。
失敗。その二文字が重く僕へとのしかかってきた。
後に、彼女は自分のミスだと言ってきた。
……彼女の教え方は、自身の経験則に基づく。それが仇となったと彼女は言った。
僕は、あの新しい肉体を受け入れることが出来なかった。自身の穢れたマグルの血を否定しながらも、それが自身であることを受け入れていた。
彼女はその点で、完璧な肉体であるなら受け入れることなど容易と考えていたらしい。当然だ。僕でさえ、そうだと思っていたのだから。
最後の最後を失敗で飾ってしまった錬金術学。そのこともあり、ホグワーツ卒業後は彼女との関わりも疎遠になっていった……。

「久しぶりだな、トム」
時は流れ、俺様は闇の帝王として魔法界へ君臨した。
俺様の掲げた純血主義に呼応し、同士となった魔法使いは数知れない。死喰い人、と銘打った俺様へ忠誠を誓う配下も生まれた。
ただ一つ、俺様の掲げる純血主義には一つ裏があった。
才ある者こそ素晴らしい。たとえ純血であったとしても、無能や怠慢を許す俺様では無かった。純血というだけの無能がどれだけいたことか。無知ならば使いようがあれど、真に無能で忍耐もないボンクラは粛清してもあふれんばかりに存在していた。
「ずいぶん派手にやってるそうじゃないか。アルバスが嘆いてたぜ？」
「カリオストロ先生も分かっているはずです。今の魔法界は、無能どもが多すぎる」
そして今。
俺様は彼女の前にいる。ダンブルドアの目も潜り抜けて、彼女を誘いに来た。それだけの価値が彼女にはある。
「共に理想を同じくする、同士として。カリオストロ先生の力をお借りしたいのです」
「はっ、オレ様とお前の理想が同じと来たか。とんだ勘違い野郎になったもんだ……それとも、魂を裂きすぎてまともに思考すらも回せなくなったか？」
そう、俺様は分霊箱に手を出した。
その過程で俺様の顔も崩れ、力も削ぎ落ちてしまったことは認めよう。それでも、死を克服したかった。それほどに、あの死の体験は恐ろしかった。
「オレ様は真理の探究者。革命だのなんだのってのをやりたいんだったら自由にやってろよ、オレ様を巻き込まずにな」
それだけ言って、彼女は向き返った。もはや、俺様に興味などないと言わんばかりに。

杖を握る手に、力が篭った。彼女の実力は折り紙つきだが、性格自体は難点だ。いっそ服従の呪文で……と、杖を振り上げようと思ったときだった。

「ま、うまく行ったら確かにオレ様も過ごしやすい世界になるかもな。応援くらいはしておいてやるよ」

「……分かりました。期待して待っていてください」

彼女のその言葉を聞いて、杖を振る気が急に失せてしまった。

……せめてもの激励が、彼女の最大限の譲歩だったのだろう。ならば、俺様がここにいる理由も最早ない。

たとえ彼女を引き入れることに失敗しようとも、死喰い人による侵攻は優勢だ。このまま行けば遠からず、魔法界は俺様のものとなろう。

そう考えていた矢先に、聞き捨てならない予言を聞いた。俺様を滅ぼす子が生まれたというものだった。

だが、それがなんだと言うのか。俺様に楯突くあの忌々しい騎士団からも、結局は裏切り者が現れた。正義を気取る騎士団の瓦解が、内部からとは皮肉なものだ。

それだけ俺様の掲げる世界を、本能的に望んでいる者がいると思うと高揚感が高まってくる。予言がどうしたというのか。今の俺様は分霊箱を通した不死が存在する。滅ぼすことなど不可能！

だが、俺様は敗北した。

正直に言って、わけがわからなかった。子供どころか、赤子にこのヴォルデモート卿が敗北したのだ。

赤子の家へ襲撃して、その赤子の夫婦を殺すところまではよかった。赤子に放ったはずの死の呪いが返り、俺様はゴーストと化した。苦痛だった。死にも等しい状態で、俺様は死すらも許されなかったのだ。

俺様は苦痛に耐えた。そう、耐え忍ぶことこそ錬金術学で学んだことの一つではないか。

耐えて、耐えて、耐えて、何年にわたって耐えた。そして、ついに俺様に転機が訪れた。俺様の潜伏先へとやってきた、おろかな男。名をクィレルと言ったが、その男に無我夢中で取りついた。

『ホグワーツへ……錬金術……』

たとえどんな状態であったとしても、俺様は復活してみせる。

そしてもう一度、闇の帝王として君臨して、魔法界を変えてみせる。

たとえ、どれほど時間が掛かろうとも。

ある魔法魔術学校校長は

「ホグワーツ魔法魔術学校校長。就任おめでとう、ダンブルドア。そしてホグワーツの校長となった君に最初に伝えることがある。錬金術師カリオストロは、決してホグワーツの外に出してはならぬ。良いな？」

ワシがホグワーツの校長として就任して、前校長から最初に教わったことがこれじゃった。

錬金術師カリオストロ。１０００年の時を生き、自ら不死を証明する生きる伝説。ホグワーツ創設者の『協力者』。それが今までのワシが知りうる彼女じゃった。

「確かに、今でこそ錬金術を教えるという『教師』の役目をカリオストロは全うしておる。だが、それは誓約によって縛られているから行っているだけなのだよ」

ホグワーツの校長にのみ、代々引き継がれるホグワーツ魔法学園の真実。

ホグワーツは数多の魔法使いを育てる場所であると同時に、『悪魔』を捕らえておく『牢獄』であると言う。

過去を遡ること、それはホグワーツ創設の時代。

偉大なるホグワーツ創設者たちは、偶然にもカリオストロに出会ったという。魔法界にて彷徨っていた彼女は、全く信じられぬと思うがこの世界の魔法を一切知らなかった。

そして、創設者たちを持ってしても彼女の出自はわからなかった。

本人曰く、長い封印の間で飛ばされたと言っておった。詳しくは語らぬとも、同じ世界の住人ではないということくらいは分かる話じゃった。

創設者たちと出会った彼女は魔法を知り、取引をした。己の知る錬金術と、魔法の知識を交換しないかと。

枯花が水を得た如く。彼女は見る間に知識を吸収し、魔法を会得した。一方の創設者たちはカリオストロが出す錬金術に難色を示していた。

知識としては分かる。ただし、それは人の倫理を侵すものだ。

程なくして、魔法界はカリオストロの知識を『悪魔』の知識とした。そのことを受けた創設者たちは彼女を放置することを良しとしなかった。それは彼女から人々を守るためか、それとも人々から彼女を守るためか。今ではそれを知るものもおらぬ。

カリオストロは開校して間もないホグワーツへ入った。創設者たちがどのような手を取ったかは定かではないが、彼女はこのホグワーツで教職を取ることを責務として与えられておる。

ただしそれは呪いであり、彼女の魂を束縛するもの。

肉の器だけでなく魂すらも縛る呪いによって、彼女はホグワーツからの出入りが完全に不可能となっている。とはいえそれは呪いによる誓約であり、完全ではなく抜け道もある。

完全にホグワーツを出入りできない状況では、カリオストロの知識を生かしきれないのは事実じゃった。故に、ホグワーツの校長は彼女に出入りの許可を与えられる。ホグワーツの校長は代々、カリオストロの呪いの管理を引き継いでおった。

しかし、それは同時にホグワーツ校長だけは彼女に気を許してはならないということでもある。

先の通り、人の倫理を屁とも思わぬ彼女である。本気でかかれば人ひとりを操ることなど造作も無いじゃろう。

だからこそ、気を許してはならない。彼女の人格は間違いなく破綻者であり、秩序を混沌に変えてしまうことは造作もないのだから。

「ねーえー、ダンブルドアおじいちゃん。今暇ー？」

「ホッ？おや、カリオストロ。少し待っておくれ、この書類だけ終わらせたら向かうでな」

校長室にて執務を行っている際に、気のしれたふうに彼女が入ってきた。

合言葉を変えたばかりのはずの門番が素通しなのは、もはや魔法生物という時点で彼女に逆らえるわけが無いとも取れる。

「さて、珍しいの。何ぞあったのかの？」

「んもー、見て分かんないの？ハロウィーンだよ、ハロウィーン！」

よくよく見ると、カリオストロはいつもの装いからカボチャを意向を凝らした衣装に変わっておった。小脇に抱えた戦利品を見るに、ここに来るまでの道中で生徒からも巻き上げてきたらしい。

ワシは懐を弄り、常備していた飴を取り出そうとして、その前に一言彼女に言った。

「おお、そうじゃの。お菓子かイタズラか、どっちが良いかの？」

「……それ、こっちが言う方じゃないかな？ダンブルドアおじいちゃん」

「カリオストロ先生に比べれば、ワシなぞまだまだひよっこじゃからのう……カリオストロ先生からはお菓子はくれないのかのう。寂し

いのう」
「えっ。あ、えーっと……ちょっと待って用意はしてあるからな、忘れてきてるわけじゃないぞ」
ごそごそとポケットの中を探し始めるカリオストロ。
意外と彼女は律儀であり、もらうだけの関係を良しとしない。錬金術における等価交換を原則としているのかは定かではないが、貰った分は返すというのが彼女の主義らしい。ただし、ここに奪った場合は含まれないのが玉に瑕じゃが。
「はいよ、トリックオアトリート。じゃあダンブルドアおじいちゃんからもちょうだい☆」
「トリックオアトリート。じゃあワシからはこの飴ちゃんじゃ」
「わぁ、いつものだ」
飴をもらうやいなや、口に放り込んでカリオストロは真面目な顔になる。
「なあ、アルバス。やっぱりまだダメか？」
「錬金術の授業は6年からじゃ。こればかりは譲れぬの」
これでも大譲歩じゃよと付け加えて、ワシは彼女にそう言った。
「やっぱり時間が足りないよなぁ。短い時間でオレ様が今節丁寧に教えてやって、ようやく踏みかかりに入ったところで全員巣立っちまうんだ」
「じゃからと言って1年次から錬金術を教えるのは容認できんの。魔法のまの字も知らぬ子供たちでは、錬金術を教える前提にすら届かぬよ」
歴代の校長にも彼女は言ってきたらしいのじゃが、彼女は錬金術学を早期に開講することを申し入れておった。
彼女に言うとおり、魔法の前提知識が無いと錬金術学は難しいというのもある。しかし、彼女の教え方にも問題があるのは事実じゃった。
校長になってから聞き及ぶ範囲でも、彼女の教え方はまったく変わっていない。その思想は染み込みやすく、いとも容易く人を変えうる。青年期で最低限の自立した精神があるならばともかく、少年期で

彼女に多く接した時に何が起こりうるか。
魔法界には魔法界の常識があり、それを破らないからこそルールが保たれる。容易くそこを乗り越えてしまう者が現れてしまったら、秩序の崩壊が待っていることは想像に難くない。
「ちぇー、ダンブルドアおじいちゃんのケチー」
「心外じゃのう。ほれ、もう一つ飴ちゃんを追加じゃよ。これで機嫌を直しておくれ」
「そんなんでオレ様の機嫌がすぐ治るとでも。んっ、なんだこれ、しゅわしゅわする」
「最近手に入ったマグルの飴ちゃんじゃよ。これが結構刺激的での」
初めて食べたのか、不可思議な顔をするカリオストロ。外見相応に百面相をする彼女は愛おしく思う。
外見と違い、中身の方はと言うと。ワシが知る限りでは生徒のことは考えておるし、そのためなら彼女も労力を惜しまない。律儀というべきか、彼女は生徒自身が投げ出さない限り、教えることを止めたことはない。
長い年月をかけて変わったかは知らない。しかし、今のカリオストロは『悪魔』などではなく、れっきとした教師じゃ。その点から言って、ワシは彼女のことを信頼していたと思う。

認識が甘かったといえばそれまでになる。彼女自身の動向だけに目を向ければ良いというものでもなかったであろうに。

死喰い人を名乗る魔法使いたちが現れ、魔法界を荒らし回ったのは記憶に新しい。
頭目たるヴォルデモートが消失してからも、事態の鎮静化を果たす

のには長い月日がかかった。ヴォルデモートを破った赤子が、その後も死喰い人に狙われてしまう程度には事は根深かった。
幸いにも、生き残った男の子……ハリー・ポッターはその母、リリーによって護りの魔法をかけられておった。死喰い人の襲撃が継続するというのならば、赤子の、ハリー・ポッターの命も危うい。ワシはこれを継続できるように魔法を改変し、そしてハリーの叔母たる者に預けた。後は魔法界の死喰い人を対処できれば問題なく事態は終わる。
はずじゃった。

『魔法省より、ホグワーツへ！多数の死喰い人を育て、あまつさえ闇の帝王に魔法界の転覆をそそのかした魔女、錬金術師カリオストロの魔法省出頭を命ずる!!!』

今回の騒動における、主たる魔法使いたち。死喰い人。その過半数が錬金術師カリオストロの授業を受けたものであると、魔法省が表明を出してしまった。
彼女の授業が思春期の青年に影響を及ぼすことは分かっていた。しかし、今回の騒動は強烈な先導者がいたからこそ起きたことである。しかし、それが分かっているのはごく一部のみ。
闇の魔法を間接的にでも教えて、あまつさえその教えた人物が大勢の人々に危害を加え、時として命を奪った。教えなければ起こらなかったことであると。糾弾するなと誰が言えよう。

「ガラにもなく、オレ様が真面目に教育なんざした結果がこれだ。これでも別に悪くないかと思ってたんだが……まあ、生徒の不始末は先生がとるもんだろ」

カリオストロの裁判は有罪で終わった。
ホグワーツ校長として、彼女を連れ回す役目を持つワシも裁判に同席した。裁判中、カリオストロが本物なのか偽物なのか議論が移った

りもしたが、カリオストロの審議自体は最初から決まっていたかのように進んだ。
執行の内容は最高刑。吸魂鬼のキスによる魂の剥奪じゃった。
有罪が最初から決まっていたからなのか、法定にはすぐさま吸魂鬼が連れてこられた。カリオストロは両手を縛られてはいるが、受け入れるつもりなのが身じろぎ1つ起こさない。が、吸魂鬼が迫ると同時に。

「オレ様の唇を奪うなんざ、まず存在を書き換えてから出直して来い！」

彼女がそう言うと同時に、吸魂鬼の姿は可憐な美少女へ変貌していた。法廷内に戸惑いと困惑が生まれたが、最も困惑していたのは吸魂鬼だろう。

「ま、これくらいなら許してやるか……んっ」

その吸魂鬼へ自ら唇を重ねたのはカリオストロ。姿形が変わっていようと、吸魂鬼の機能は変わっていない。魂の剥離と同時に、人形のように彼女の体が事切れる。それと同時に、ワシにも変化があった。
それは彼女の呪いが消えたこと。ワシの権限において連れ回すという文言が書かれていた誓約書も、青い炎に包まれて燃え尽きた。
錬金術師カリオストロは最高刑執行により廃人化。これが魔法省による公式記録である。

「んー、自由に外を歩けるっていうのはやっぱ良いな。あの忌々しい呪いも吸魂鬼に剥奪してもらったし」
ロンドン郊外に、一人の美少女が大きく伸びをしながら歩いている。
その可愛らしさに注目が集まろうとも。それが当然と言うふうに彼女は意に返さない。古ぼけたマップを頼りに、彼女はある家まで突き進んだ。

その家の庭には、二人の少年がいた。小太りで身なりの良い少年と、痩せっぽちで貧相な少年。
目当てが見つかったのか、薄い笑みを浮かべた美少女が歩き出す。小太りの少年が美少女に気づき、こちらに来るのかと照れ顔を浮かべた。
そんな少年を眼中にも入れず、いじめられていただろう蹲っている貧小な少年に、美少女は声をかけた。
「お前がハリー・ポッターだな？」
「……君は？」
突然のことに、少年が返せたのはそれだけ。
それでも、少年は彼女の姿はしっかりと目に捉えていた。いや、目が離れない。離れることを許さなかった。
「オレ様の名前はカリオストロ。今日から、オレ様がお前の先生だ」

ある純血の一族は

「ようこそ、セブルス。歓迎するよ」
「お構いなく」
闇の帝王が没してから数年。お互いに色々と忙しい身ではあったが、なんとか暇を見つけて彼を招くことができた。
セブルス・スネイプ。私と同じ死喰い人であり、現在ではホグワーツで教職についている私の後輩だ。
「さあ、中へ。急ぎ相談したいことが」
「父上！行ってきます！」
私がセブルスを家の中へ招こうとしたその時。我が息子、ドラコが不意に飛び出した。
玄関先の客人にあわやぶつかる寸前と言ったところで止まり、軽い会釈と同時に飛び出していく。
「随分と元気を持て余したご子息のようで」
「……悪く思ってやらないでくれ。ここ数日ほど、とある人物を探しているようでな」
「ご子息一人で大丈夫なのですか？」
「なに、危機管理はしっかりと覚えさせている。ドラコは賢い、それに探しているのも少し年上の少女と聞いている。親が出歯亀をするほど察しが悪いつもりはないさ」

我が息子ドラコには正しき血が流れている。当然、同年代の付き合いも親である私が決めるのが当たり前だ。
しかし、ドラコが自らの意思で同年代の友達、いやガールフレンドをもう既に作っているというのなら私にそれは止められない。むし

ろ親としてドラコを応援するのが当然と言えるだろう。仮にも魔法界にいる少女だ、純血とは言わずともマグル生まれということは少ないだろう。
　もっとも、そんな娘を好きになるようなことはないだろうが……。おっと、セブルスが咳払いをした。意識せずに息子自慢をまたしてしまっていたかな、これだけは気付けないものだ。

「して、緊急事態ということですが」
　切り出したセブルスにうなずきを合わせて、私は一つ映像紙を取り出した。紙の中に描き映し出されているのは、見聞きされた実際の映像だ。
　マグルの一軒家、庭にいる貧相な少年と小太りの少年、そこに現れた一人の美少女、そして貧相な方の少年と美少女の消失。
「……これは」
「魔法省はまだ公開していないが、ツテで入手した。一昨日、『生き残った男の子』が消失した」
　セブルスは食い入るように映像紙を見つめている。
　そこに乗っていたのは我らが闇の帝王を破った、赤子が成長した姿だった。名をハリー・ポッター、魔法界では英雄と持て囃されている少年だ。

そしてもう一人。ここで言うのは太った少年の方ではなく、突如現れた美少女の方だ。煌めく髪、リボンをあしらった可愛らしい服装、魔法使いが羽織るものとは違う派手な赤いマント。
「私はかの御仁を実際に見たことがない。法定記録における特徴と、似顔絵くらいでしか判別ができなかった」
映像紙から離れ、一息つきセブルスは私に向き直る。平静を装ってはいるが明らかに動揺した目つきだ。
「……その少女。やはり錬金術師カリオストロなのだな？」
「間違いありませんな。魔法省による執行程度で死ぬはずが無いとは思ってはいましたが……」
セブルスの声が震えている。
彼にとって錬金術師カリオストロは恩師だと聞く。これは彼にのみならず、死喰い人であるなしに問わず彼女を恩師と称えるものは少なくない。かの闇の帝王ですら錬金術師カリオストロに師事し、あまつさえ彼女を仲間に引き抜こうと帝王自らが動いたこともある。
「歓喜に浸るところすまないが、ここからが本題だ」
この言葉を聞き、セブルスの顔が引き締まった。
やはり彼は優秀だ、感情に流されることはあったとしても理性を取り戻すのに時間がいらない。あの狸爺の元で教職としてつけるだけの度量があるのにも頷ける。
「彼女がカリオストロだとして、問題はどうしてこのような行動に出たのかだ」
「ハリー・ポッターの消失……いえ、誘拐ですかな」
「誘拐、か。この紙面では少年と同時に消失しただけだ。なぜその発想に至った？」
セブルスから出たのは誘拐という言葉だった。
実のところ、私はセブルスのことを全面的に信用しているわけではない。不必要な部分は伝えない、そういった面が彼にはあることは感じていた。
だからこそ、ここでセブルスから可能な限りの情報を引き出す。師事したことがあるからで分かることでも、それともホグワーツの教師

として同じ立場になったから。でもいい。
魔法省は『生き残った男の子』の消失を恐れている。昨日ならばいざしらず、さらに一日たった今ですら新聞記事に一切この事件は乗っていない。この映像紙も極秘事項となっていた。間違いなく情報統制をかけていると言っていい。
ここで『生き残った男の子』を早期発見したのがマルフォイ家になれば、死喰い人時代の疑いを払拭することも可能だ。いや、それどころか魔法省に圧力をかける重要な手札にもなりうる。
是が非でもここは先手を打ちたい。そのためにもこのセブルスという男から、ほんの少しでも情報を聞き出さなければならない。
「ふむ……ではまず。我が師は別段、純血主義というわけではないことを理解していただきたい」
「何？闇の帝王の師が純血主義ではないと？」
「そうです。彼女は血筋よりも本人の……あー、才能と言えばいいのでしょうかな。とにかく個人主義であったことは間違いありませんな」
セブルスの言葉を聞き、過去の死喰い人時代を思い出す。
たしかに純血であろうと帝王は失敗を許さず、成功するもの、または失敗を挽回しようとした者を重宝した記憶がある。加えて特に過激な死喰い人では、同じ陣営でも無能はいらんと勝手に処罰すら下していたものもいた。
「そう。そういった個人主義だった彼女にとって生徒とは興味の対象であった、と我輩は考えております。そして我らが帝王も彼女に師事した一人、これを打ち破ったのがただの赤子であった『生き残った男の子』」
「……最優の弟子を打ち破ったから、その赤子が気になり弟子にするために誘拐したと？」
「あるいは、闇の帝王を打ち破った赤子にどんな秘密があるのか、調べるためにということもあるでしょうな」
ひとしきり語ったセブルスは目を閉じ息を吐く。
様子を見るに、嘘をついていない。

「では、この後について聞きたい。カリオストロはどう動くと思う?」
「もはや何もかも手遅れでしょうな」
私の問にセブルスはこう答えた。カリオストロがどう動くとも違う、何もかもが遅いと言ったふうに。
「師を捕らえることはもはや不可能でしょう。彼女は魔法界に拘らない。むしろこれが一昨日の話だと言うのなら、もう既に英国内にいるかどうかも疑わしい」
「ま、待ってくれセブルス。馬鹿な、魔法界に拘らない?魔法を教えるか研究をするために誘拐したと言ったではないか!」
「それは魔法界にいなくともできることです」
セブルスは淡々と続けていく。
「我が師のことを聞き、『生き残った男の子』を先立って救出してマルフォイ家の汚名を拭い去る。おそらくはそのために我輩から情報を聞き出そうとしたのでしょう。ですがそれはもう無理だと忠告させていただきましょう」
セブルスの顔は私の目を捕らえて話さない。
よもや開心術かとも思ったが、これは純粋に彼自身が推測したものだ認識を改めた。私の話はあまりにも強引過ぎた、たとえそれが仲間であったセブルス相手であったとしてもだ。
「我が師は魔法界にて生粋の魔法使いではありますが、マグルの文化に差別心があるわけでもない。魔法でほんの少しごまかして、マグルの正式な手続きで国外に出ていたらもう英国魔法省では……いえ、我々英国魔法使いで追うことなど不可能でしょう」
一息に師のことを吐き出したセブルスの顔は、とても残念そうなものだった。
追えるというのなら、自分が追いたいと言った雰囲気はまったく嘘には見えない。加えて錬金術師カリオストロについて私は大きく見誤っていた。
純血主義とは違う個人主義。魔法界に拘らない思想。そしてなにより、母国にすらかの御仁は未練など無かったのだ。

自分が知る限りの情報は渡したといい、セブルスはホグワーツへと戻った。
セブルスの忠告は受け取るが、魔法省や私のツテを使い情報を集めることは続けるつもりだ。しかし、規模がもう既に国外にまで発展してしまった以上は期待できない。
手が遅かったか、いや情報自体は魔法省から最速で渡ったはずだ。そう、魔法省さえ上手く情報を出せばまだ期待はあったのだ。
「ただいま帰りました！」
無能な魔法省に憤りを感じるも、結局は後の祭り。憤慨していたところでただ疲れるだけだ。
我が息子の元気な声が聞こえる。連日、件の少女を探しに行っては帰ってきて意気消沈していたのだが、今日に限っては随分と覇気がある。
「おかえり、ドラコ。随分と上機嫌じゃないか」
「父上、その。頼みがあるんです」
「うん、どうした？なんでも言ってみなさい」
普段からワガママを言うドラコだったが、子供のワガママなど可愛いものだ。と私はできる限り叶えてきた。だが今日に限って、ドラコはとても殊勝な態度でこう言った。
「お願いです。僕を……僕をホグワーツに入れてください！」

「しっかし、とんだ約束しちまったな……」
ダイアゴン横丁にある杖専門店、オリバンダーの店。
その店の前に手持ち無沙汰に立つ少女、いや美少女がいた。刻限は夕刻に差し掛かり、太陽は彼女の頭に煌めくカチューシャを照らす。
「決まったよカリオストロ」
「お、そうか」
店内から一人の少年が現れる。丸い眼鏡が特徴の少年だ。
美少女と少年、到底釣り合わない二人組は周囲から好奇の目で見られていた。この時期に杖を買いに来るというのも珍しいのだろう。
「じゃあねー、オリバンダーおじいちゃん！体を大切にね☆」
「……よもや、あなたにそんな呼ばれ方をするとは思っても見ませんでしたな。渡した杖は間違いなく彼の生涯を共にできるものと自負しております」
「そうなの？」
「どうかなー？物を大事にすることはいいことだけど、ステップアップも大事だとカリオストロは思うよ☆」
美少女はそう言ってくるりと自分の杖を出す。

何の変哲もない杖だ。そう、なにもないところからいきなり現れたこと以外は。
「いいか。そいつはあくまで『練習用』だ。オレ様の弟子になる以上、こんなジジイの作る杖なんかよりも自分で作った杖を使えるようになれ」
指揮棒のように少年を杖で指し、先ほどとは打って変わった雰囲気に美少女は変わる。
威圧感がまるで違う、顔を反らすことすらできない美少女の圧に、少年があわや膝を折ろうかというところで緊張は解けていく。
「ああ、そうだ。数年後に一度ホグワーツに戻ることにした。お前が入学できる歳あたりになったら、またこっちに来ることにする」
「……それって、僕が魔法学校に入学するってこと？」
「魔法学校に入りたいなら好きにしたらいいさ。オレ様はオレ様の用事で戻ってくる、その時オレ様についてくるもよし、とっくに自立してどこぞで暮らすのもよし。全部はお前次第だよ、ハリー」
「……わかった、そのときになったら考えるよ」

魔法省が『生き残った男の子』の消失を発表したのは、その消失が発生してから2週間後のことであった。
このことを受けて、魔法省が事件をもみ消そうとしたことが広まり魔法省の権威は失墜。『生き残った男の子』の捜索が魔法省以外の民間団体でも開始される。
そして『生き残った男の子』を消失した張本人として、錬金術師カリオストロが指名手配となる。手配書として配布された彼女の人相書きは、奇しくも絶世の美少女として描かれていた。

ある純血の少年は

その少女は可愛らしかった。
まるで童話の中から出てきたような、魔法界でも類を見ない輝きを放つ少女。
見かけたのは偶然。いずれ手に入れるであろう、僕専用の杖。それが気になって、杖の専門店を眺めていた。
店から出てきた彼女を見た瞬間に、杖のことなんてどうでも良くなった。そしてそのときに話しかけられず、思わず見とれてしまったんだ。
また会いたい。その一心で探し続けた。幸い、徒労には終わらなかった。見つけられたのは同じ場所、オリバンダーの杖専門店。
店を出てすぐの場所で、待っているのか、黄昏れているのか。その区域だけ、一枚の絵に切り取られたかのように神秘的で、手を出すのが憚られた。僕が手を出して、その絵を壊してしまっていいのだろうか。
「あ、あの！」
良いに決まっている。
僕は誰だ？マルフォイ、ドラコ・マルフォイだ。貴い血を持つ家系の一つ、マルフォイ家の跡取りだ。僕以外がその絵を踏みにじることは許されないだろう。けれど、僕ならその中に混ざっても問題ない。
「ん？」
「君、この辺で見ないよね。どこから来たの？ああ、僕はドラコ。ドラコ・マルフォイって言うんだけど」
意を決して話しかけたら、思った以上に口が滑る。
自分の自慢がしたいわけじゃない。ただ、彼女と話がしたいだけ。けれど、口から出るのはどうにも自分の家のこととか、杖を買いに来てるなら買ってやろうか、と自分でも余計な世話だと思えることばかり。それしか無いわけじゃないのに、聞きたいことが出てこない。
早口でまくしたてられた彼女は、目を丸くして僕を見ている。彼女が喋る暇も与えず僕が喋るものだから、反応を聞くことも出来ない。

そうじゃないだろう、ドラコ！
「それで、えっと……」
「マルフォイ家の跡取り君が、カリオストロに何の用かな？って、言わなくても正直わかっちゃうけど」
背を預けて聞いていた彼女、カリオストロがこちらに歩いてきた。
その声に、思わず頭がしびれてしまう。まるで心を掴まれた気分だ。彼女は僕の間近まで来て、耳元でこう囁いた。
「好きなんだろ。こういう女の子がさ……？」
「～～～～～～っ!!!!」
全身が一気に沸騰したかと思った。
囁いた吐息が耳にかかって、思わず体が跳ね上がってしまう。
「クッ、アッハッハ！あー、面白いなお前。そんなに分かりやすいと、これからマルフォイとしてやっていくなら苦労するぜ？」
「う、あ、ぐっ……そ、それは君には関係ないだろ！」
からかわれた。
その子はイタズラに成功して満足したかのような顔で、口角を釣り上げて笑っている。
けれど、これがようやく最初の会話だった。彼女の悪戯に乗っかった形で、ほんの少しばかりとりとめのない会話をした。
「カリオストロは、どの魔法学校に通っているんだ？」
チャンスは今しかない。
その時の僕には、彼女が少し年上に見えた。話の中でこの店に来ているのは付き添いと聞いたのもあって、弟か妹が入学するから買い与えに来たものだ、と考えたんだ。
「ん、そうだな……ドラコはどこに入学するって話になってるんだ？」
「父上がダームストラング、母上がホグワーツを推してる。けど、たぶんホグワーツかな」
母上の懇願には父上はきっと勝てない。ダームストラング校はイギリス国外にあって、母上は僕が離れることを嫌がっている。
ホグワーツか……。と彼女は少し考え込む。言い淀んでいる彼女を見て、なんとなくだが察してしまった。きっと彼女はホグワーツ生

じゃない。
「け、けど！僕から頼めばきっとどこにだって行ける！イギリスの国内外なんて関係ないさ！」
「ああ待て、決めた。今決めた。そのままホグワーツを目指しな」
焦りを抱いた僕がまくしたてる。しかし返ってきた言葉はそのままホグワーツに入れという言葉。
「お前が入学する頃に、こっちに戻ってくることにした。お前がオレ様のことを忘れてなければ、また会ってやってもいいぜ」
「っ、本当かい!?」
尊大で、自分勝手にすべてを決める彼女。けれどその顔は笑顔で、思わず追従してしまう。
けれどそれがどうしようもなく嬉しく思ってしまった。まるで、自分のために決めてくれたかのようで嬉しかったんだ。そうと決まった以上、なんとしてもホグワーツに入学しなければならない。
「あ、おい！」
いてもたってもいられなくなり、僕は弾かれたように帰路についた。
今思えば、衝動的すぎたと思う。彼女と会えるチャンスが本当に訪れるかどうか、未確定でもまた会えるならと。次の機会を逃してはならないと、とにかく早く行動した。その甲斐もあって、僕のホグワーツ入学が決定した。けれど、その後にもっと重大なことがわかってしまったんだ。

錬金術師カリオストロによる、生き残った男の子の誘拐。

魔法界で一大ニュースとなった事件だ。首謀者であるカリオストロの手配書が配られ、それを見て僕は驚愕した。僕の出会った彼女、カリオストロは……その手配書に移された顔と瓜二つだったんだから。
世間では魔法省に対しての管理不行き届きに対する非難。魔法省は頼れない、と生き残った男の子を探すための民間団体が発足された

りしたらしいけど。
そんなことはどうでもいい。重要なのは彼女のことだ。
錬金術師カリオストロと、出会った彼女が別人だなんて思っていない。他人の空似で済まされない。なぜなら彼女のように可愛らしい子なんていないんだから。
『また会ってやってもいいぜ』
夕刻の約束が目に浮かぶ。
果たされない約束になってしまったんだろうか。それとも本当に守ってくれるんだろうか。不安と期待が折り混ざった自分がいて、きっと期待している方に天秤が傾いている。
錬金術師カリオストロの手腕を持ってすれば、有象無象の手をかいくぐるなんて造作もない。
錬金術師カリオストロが、子供の約束なんてものを律儀に守るのか？
どちらも僕の本心だ。未来はわからない、予想をしたところで他人任せの仕方ないことだとしても……期待することが悪いとは思わない。
だから、会いに来てくれカリオストロ。ああ、遠くに行かないでくれ。
走っても走っても追いつけない。遠ざかる、あの日の夕刻。僕はこんなにも頑張っているのに、どうして追いつけないんだ。
がくんと、足元に穴が空いた。ほんの少しの浮遊感と、より遠ざかる情景を感じながら……目が冷めた。

がたん、ごとんと。
列車の揺れを感じるのと、頬杖がずれ落ちたことが分かった。
……夢を見ていた。自然と起きるでもなく、起こされた起き方をしたからどんな夢を見ていたか覚えている。
あの日から数年たった。僕は今、列車でホグワーツに向かってい

る。コンパートメントの一室、僕の友人として用意された二人は、どうにもうるさくて追い出した。だから他に乗ってる人はいなかったはずだ。
「ああ、起こしちゃた？」
僕以外、誰もいないはずの一室で声をかけられる。
若干の寝ぼけ眼でも、目の前に誰かいることが分かった。声からして少年の声だと思った。
「他に空いてる部屋がなくて、寝てたみたいだから起こさないようにしてたつもりだけど」
「……別に、君のせいで起きたわけじゃない」
さっきの目覚めで、眠気はもう無い。それに寝覚めが最悪なせいで眠る気にもならない。
視界がはっきりしてきて、ようやく目の前の人物を捉えられた。少年かと思っていたけれど、その装いは少女のものだった。赤みがかかった長髪と緑色の瞳を隠す丸メガネ。髪は若干のくせっ毛なのか、先端は少しクシャクシャだった。美少女、とまでは言わないけれど。可愛らしいほうではあると思った。
「そう、それならよかった。同席してるんだから、気分の悪いまま一緒にいても仕方ないしね」
「よく言うよ。僕が寝てるのをいいことに、許可も何もなく入ってきたんだろ」
「起こして許可をとったほうが良かったかな？どうにも夢見心地が良さそうで、起こすのが忍びなかったから」
赤毛から父上の目の敵であるウィーズリーを連想したけど、生意気なウィーズリーとは違いそうだ。ちょっと男勝りな子だな、という程度。
けどそれだけだ。お互い会話になる話題もないし、部屋の中を沈黙が支配する。赤毛の子は読書をしていたらしく、そのまま視線を下に落とした。眠りにつくにも眠気も無い。若干の小腹が空いたこともあり、ふと蛙チョコレートを買ってみることにした。
チョコレートのおまけにカードがついてくる。いや、カードのおま

けにチョコレートがついてくるんだったかな……？そんなものを買うなら、目的のカードを言いなさい。それだけ買えば良いだろう。と蛙チョコレートそのものを買うことは、父上に禁止されていたな……。結局、目的のカードがあるのか無いのかわからずじまいで、言い出せなかったんだけれど。

抑圧されるとなんとやらとは言うけど、ここには父上の目はない。ちょうど来た売店でついつい買ってしまう。衝動的に買うことに何の問題があるのだろうか、いやない。

「なにそれ？」

「蛙チョコレート。ほら、カードのおまけにチョコレートがついてくるんだ」

「それ、逆じゃないの？でも面白そう、僕にもください」

赤毛の子も数枚買ったみたいだけれど、そんなんじゃあ目当てのものは当たらないさ。とりあえず全部、と財布を見せて買い漁る。チョコレートが余ったんならあの二人にでも渡せばいい。

「あっ」

大量の包装を向くことに夢中になっていたときだ。

目の前の赤毛の子が綺羅びやかな装飾をされたカードを引いていた。なんだかんだで僕も興味がある、覗いてみたらそのカードは……。

「錬金術師、カリオストロ」

「やった。大当たりじゃないかなこれ」

「そ、それを渡してくれ！僕だってそれが欲しかったんだ！」

入っているかどうかもわからなかった、彼女を模したカード。

なんだかんだで蛙チョコレートは商品だ。そして入っているのは、有名な魔法使いたちのカード。確かに錬金術師カリオストロは有名だ。けれどそれは悪名としての意味合い。昔の悪い魔法使いという扱いであれば入っていてもおかしくはないが、今現在でも彼女の悪名を広げている民間団体は活動している。

「えー。そんなに買ってるんだから1枚くらい入ってるんじゃないかな」

「クソッ。これじゃない、これでもない、違う、違う、違う！」
結局、全ての包装を剥き終わって。カリオストロのカードは見つからなかった。目の前でカリオストロのカードを見ている彼女に、出てきた全部のカードと交換してくれと頼んでみるも。
「僕の目当てもカリオストロのカードだけだもの。嫌だよ」
にべもなく袖にされてしまう。けれど、一つ引っかかったことがある。
「なんで、錬金術師カリオストロのカードがほしかったんだ？その、彼女は」
「生き残った男の子を誘拐。ついでに闇の帝王、ヴォルデモートだっけ。の先生だった。悪名高い悪い魔法使いのカードなんて、どうして欲しがるのかってことかな」
「……おい、闇の帝王の名前はおいそれとひけらかしてはいけないんだぞ」
しれっと何でも無く闇の帝王の名を言うその子は、そうなんだ。となんとでもない風に帰してくる。流暢に英語を話しているけれど、もしかすると国外の子なのかもしれない。
「別に良いじゃないか。経歴なんてともかく、世界における唯一絶対の真実は『可愛い』なんだから」
「……は？」
「難しいことなんてないよ、僕がこのカードを欲しがったのは『可愛い』から。それだけだよ」
だからあげないもんね。と赤毛の子はカードを背に隠してしまう。交渉の余地すら無い。その子の言い分を飲むのであれば、彼女に匹敵する『可愛い』カードなんて僕の当てたカードの中には一枚もなかったから。
……そして妙に心に引っかかる。その子の言葉。
『可愛い』こそ真実だと言い張るその姿に、僕はなんでカリオストロの姿を彼女に重ねてしまったんだろうか。見た目は似ても似つかない、そのはずなのに。
結局、駅の到着と同時にその子と別れることになった。なんだかん

だで親睦が深まったと思うと、名前くらいは教えても良かったなと思ってしまう。何せ彼女は錬金術師カリオストロに対して悪い印象を抱いていなかったんだから。

ホグワーツにたどり着いた僕たちは歓迎会という形で迎え入れられた。

父上から聞いた話では、この歓迎会と同時に所属する寮が決まるという。当然、僕はスリザリンになるに決まっている。

それよりも重要なのは別にある。人混みの中をぐるりと視線を回す。

いない、いない、いない。

綺羅びやかな黄金の髪は一切見当たらない。彼女は……カリオストロはこの場にはいなかった。

ふと、遠くに赤毛のあの子がいて目が合った。軽く手を振られたので振り返す。それだけ、他に心に残ったものはない。

……彼女の言葉が嘘だったとは思いたくない。僕が入学する頃に、戻ると彼女は言っていた。別に日にちを指定してたわけじゃない。

きっと会える。自分に対してそう言い聞かせていた。

寮を選ぶテストは古臭い帽子による選定だった。

「マルフォイの子か。なるほどなるほど、やはりお前にはスリザリンが向いている。しかし、その忍耐力はハッフルパフにも向いている

ぞ」
「知れたことを言うな。僕にふさわしい寮なんて決まってるだろう」
「ふむ、それもそうだろうな。スリザリン！」
選定の帽子が余計な気をきかせなくてホッとする。僕がハッフルパフ？冗談じゃない、そんなところに選ばれでもしたら父上に合わせる顔がない。
寮の席につけば、僕をマルフォイと知って取り入ろうとする先輩方の洗礼だ。当然といえば当然だ。スリザリンにおいて純血主義の影響は非常に大きい。
寮の選定はどんどん進んでいく。最後の点呼が終わったかと思ったところに、呼び出していた先生が別の先生に耳打ちされ、驚愕の表情を浮かべていた。
「ハ、ハリー・ポッター!!」
呼びだされた名前に、その場が大きくざわついた。ざわつきの中を掻い潜って、選定の帽子をかぶったのは……あの赤毛の子だった。
「グリフィンドール！」
大きく叫ぶ帽子の声に、堂々たる姿を見せて歩く少女。『生き残った男の子』の名を受けた彼女の姿は、とても自信に満ちた姿をしていた。